# 7．京丹後市久美浜町矢田神社 文化財調査（3）―三番叟―

青野　要

## 1．はじめに

本稿は、2024 年（令和６）８月９日に、海士区公民館でおこなった聞き取り調査をもとに作成した。本稿の聞き取り対象として、三番叟が中止となる前に舞手であった山本俊幸氏と仲原毅氏にご協力いただいた。なお、三番叟とは本来、能楽の演目「式三番」を構成する舞の１つを指すが、京丹後市や一部地域では式三番全体を三番叟と呼称する例がある。矢田神社の舞も該当するため、聞き取り調査記録では「三番叟」として記録している。

日　時　2024 年（令和６）８月９日（金）　14：30-15：30
場　所　海士区公民館
協力者　仲原毅氏（1937 年〈昭和 12〉生）、山本俊幸氏（1947 年〈昭和 22〉生）
調査者　上杉和央（教員）、青野要、上武恒介、山崎敬幸（以上２回生）

## 2．式三番の概要

能楽の式三番は、①翁の前の露払いである千歳、②天下泰平や国家安穏、千秋万歳を祈念する翁、③五穀豊穣を祈り、祝う三番叟の３演目からなる（小林ほか 2012）。それぞれの名称は舞そのものを指す場合と、舞手を指す場合の両方で用いられる。

千歳は一の舞と二の舞に分かれる。一の舞は「とうとうたらり…」の呪歌を謡った後、千歳が「鳴るは滝の水」と謡いながら立ち上がり、舞い始める。二の舞は「絶えずとうたり、ありうとうとうとう」と謡いながら扇を広げて舞う。

翁では、千歳が舞っている間に舞手が白い面を着け、千歳が終わると「ありはらや　なじょの翁ども…そやいづくの翁とうとう」と謡って舞を開始する。天の拍子、地の拍子、人の拍子と呼ばれる三つの拍子を含み、それぞれ舞台の右前方、左前方、正面で足拍子を踏む。「千秋万歳の…」と謡い出し、「万歳楽」と繰り返して舞を締めくくる。

三番叟の舞は、揉の段、鈴の段に分かれる。揉の段は面を着けずに舞い、鈴の段は黒い面をつける。揉の段では舞手が「おおさえ、おおさえ、おう」と声を上げながら舞台前方の中央部へ走り出し、「喜びありや、喜びありや、我がこの所よりほかへはやらじとぞ、思う」と謡いつつ舞う。その後黒い面をつけて鈴を持った役と問答を経て、鈴を受け取り左手で広げた扇を腰にあて、鈴の段を舞って全体が終了する。式三番は儀式的要素が強く、かつては舞手が穢れを祓う目的で、奉納の数日前から食事やそのための火を他人とは別にする「別火」をおこなっていたが、現在ではその多くが簡略化されている。

## ３．聞き取り調査記録

### （１）奉納時期と呼称

三番叟の奉納時期は春で、矢田神社の例祭に合わせて４月 15 日に実施される。例祭当日のほか、前日 14 日の宵祭りの夜にも奉納される。例祭当日には、昼に矢田神社から神輿が出発した後、三番叟が奉納される。先述のように、京丹後市では式三番を三番叟と呼ぶことが多い。矢田神社においても正式名称は「式三番叟」であるが、通称として「三番叟」と呼ばれる。また、舞手の呼称も式三番と異なり、千歳、翁、三番叟に相当する役割はそれぞれセンダイ、シロキジョウ、クロキジョウと呼ばれ、山本氏はセンダイ、仲原氏は黒キジョウを務めた。表記については、口頭でのやりとりが主であったため正確な漢字表記は不明であるが、仲原義雄氏は「白キジョウ」「黒キジョウ」と記載しており、これらの呼称は舞手が付ける面の色に関連していると考えられる（仲原 1985）。なお､山本氏によればセンダイは「千代」であるという。

### （２）編成・舞台

矢田神社の三番叟は舞手３人､囃子方５人､師匠と呼ばれる役割３人の計 11 人で編成される。舞手はいずれも男児が担当し、舞手を務めた者はおおよそ 10 歳から中学卒業まで、毎年同じ役を引き継いで舞っていた。舞手となるには３つの条件があり、①長男であること、②１年以内に身内の不幸がないこと、③両親がいることが求められた。山本氏や仲原氏の頃には、戦争で親を亡くした者が舞手になれなかった例もあった。一方、舞手が減少した際には次男が舞った例もあるという。囃子方は鼓２名、横笛２名、拍子１名からなり、大人が担当する。囃子方に明確な条件があったかは不明だが、多くの場合、毎年同じ人物がその役を務めていた。また、舞の中でかけ声を発し、舞手がそれを目安に舞を進めるという役割もある。師匠は舞の中で舞手との受け答えを務める役である。師匠に関しては、山本氏の時に三番叟未経験者であった山本氏の父が代わりに師匠の役を担ったことがあった。

三番叟は、かつて矢田神社が改修によって上屋と拝殿が整備される前は境内の別の場所で舞っていたが、現在は拝殿でおこなわれる。舞手は、正面の参道に観客が集まるため、かつて参拝の帰り道として使われていた左側にある裏道から扉を通って上屋から拝殿へ出た。囃子方や師匠、神主は拝殿のふちにおり、師匠と神主は囃子方より少し控えた場所にいた。舞手の座る位置は決まっており、拝殿の観客寄り右側にはセンダイ、左側の囃子方の前裏道寄りには黒キジョウ、廊下寄りには白キジョウが座り、各々の舞が終わった後はそこで待機をしていた。

### （３）当日までの流れ

舞の稽古は１、２か月前から始まり、舞手はそれぞれ地域の裕福な家である分限者の家を訪れて練習する。本番ではその分限者が師匠役を務めることが多い。特に本番の１週間前からは、地域の分限者の家を４、５軒回りながら稽古し、その際、お菓子や食事の接待を受けた。稽古が分限者の家でおこなわれた理由は、舞を拝殿以外でおこなうには大きな座敷が必要であるためとされる。稽古の際の衣装は本番とは異なり、袴や面を着用しない。

本番が近づくと、別火に似たことをおこなう。期間は各家庭によって異なるが、宵宮の昼や前日の夜から２日間ほど、舞手を神の子とみなし、家族の食卓とは別の膳で食事をした。また、宵宮や本番前の朝には、もらい風呂が普通であった時代に風呂を沸かし、一番風呂に入り下

着を新しいものに替えて舞を舞った。仲原義雄氏によれば、「キジョウは七日間黒キジョウは5日間(ママ)センダイは三日間別飯を食べて身を潔めて祭典に出た」（キジョウは白キジョウか）と記されており、より簡略化されていることがわかる。

本番では、舞手は裏道から上屋に入り、渡り廊下で衣装を着替えて拝殿へ出る。宵宮の拝殿は薄暗いため、観客からは舞手が廊下から突然現れるように感じられる。舞は 14 日、15 日ともに同じ内容で、全体でおよそ 40 分間である。３役それぞれが扇を使い、白キジョウが大きくゆっくりな動作であることなど、基本的な要素は能楽の式三番に似ているが、センダイの舞の後に、翁にあたる白キジョウではなく三番叟にあたる黒キジョウが舞うことや、黒キジョウがはじめからセンダイより鈴を受け取っていることが特徴である。黒キジョウが「…ああめでたやな　アドの大夫殿に一言言上申そう…」と謡いながらセンダイより鈴を受け取り、舞い始める。黒キジョウははじめ素面で舞い、途中で面を着用する。

（4）舞の中止とその後

矢田神社で最後に三番叟が奉納されたのは、山本氏が中学３年生の 1961 年（昭和 36）のことである。師匠を山本氏の父が担当するなど、役割不足は以前よりあったが、山本氏と当時の黒キジョウの舞手がともに海士を離れることとなり、舞手の後継者を探すことが困難となったため、舞は中止された。現在は矢田神社の蔵の中に長持があり、その中に鼓の入った箱や、「三番叟御衣」と記された衣装箱に衣装や烏帽子、扇などが収められている。

中止後、1974 年（昭和 49）に、現在は閉校となっている海部小学校の創立 100 周年記念として三番叟が舞われた際、山本氏も横笛として参加した。その際、古老から「三番叟の面は海士から持ち出し禁止である」といわれたため、舞手は素面で舞った。仲原義雄氏の調査による伝説では、三番叟そのものが海士の外への持ち出しを禁じているとされ、口承との差異が認められる。

参考文献

小林責・西哲生・羽田昶 2012『能楽大事典』筑摩書房

仲原義雄 1985「矢田神社の三番叟」『くみはまの民話と伝説』久美浜町教育委員会

## 編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生がAdobe社のInDesignを利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。（い）

京都府立大学文学部歴史学科
フィールド調査集報　第11号

編集・発行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5
発　行　日　2025年3月31日
印　　刷　株式会社 北斗プリント社
〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町38-2